言明されていないカテゴリー使用を見る

——セクシュアル・ハラスメントの会話における性別カテゴリー——

Seeing the Categorization without Stating A Category: Sex Categories in Conversations about Sexual Harassment

鶴田幸恵

TSURUTA Sachie

We, as Sociologists or as Laymen, often explain human conducts using categories, as in “A does X, because A is woman”. But as Harvey Sacks showed, we have at least two (collections of) categories that can correctly be applied to any member of society. “Sex” and “Age”. So, here is one problem. How can we, especially as sociologists, justify explanations such as the example? Sacks’s answer is: By analyzing the orientations that members themselves regard as relevant to their conduct. But, again, we do not usually explicitly enunciate the categories that are applied to us such as in saying “I am woman, so I do X”. Here, another problem occurs. How can we access to the orientation of members? This paper will try to answer this latter problem by analyzing data in which sex-categorization is done by members themselves *without* actually explicitly stating any sex/gender category.

1. はじめに

私たちは、つうじょう、他者の性別を端的に見る [鶴田 2004a; 2004b]。つまり私たちは、他者の性別を見ただけで知ることができる。しかし、私たちが間違いなく女だと見たその人は、女であると同時に、会社員であったり、夜間の大学院に通っている学生であったりするだろう。その人の外見が女であったとしても、その人に適用することができるカテゴリーは他にもたくさんある。そして、私たちはそのつどの状況において、女として行為したり、会社員として行為したり、学生として行為したりしている。

けれど、もしある人に適用できるカテゴリーが複数あるのならば、ある行為を特定のカテゴリーによって説明することはどのように正当化できるのか。たとえば、X が調査票の質問 A に B という答えを与えたのは X が女性だからだ、とすることがなぜ可能なのか。それが外見の問題ではない以上、「観察によって」というのは、明らかに答えにならない。かつて Sacks はこの問題に取り組み、そして「参与者自身によって行われているカテゴリー使用の手続きを記述する」という方針を打ち出した [Sacks 1972a 1972b]。適用可能なカテゴリーが複数あるからといって、私たちはつうじょうどのカテゴリーを用いたらよいのか迷ったりはしない。ある人が女として行為しているのか、会社員として行為しているのか、学生として行為しているのかということは、そのつどの状況のもとで直観的に理解できている。言ってみれば、私たちは自分自身の手で、なんらかの仕方で上記の問題を解決しながら生活しているのである。そこにおいてふさわしいカテゴリーがなにであるのかは行為者自身によってなんらかの仕方で示されており、であるならば、その仕方を見ることなしに特定のカテゴリーによって行為を説明してしまうことはできない。Sacks が「成員カテゴリー化装置」と呼んだのは、その仕方のことであった。

とはいえ、このことはそんなに簡単ではない。私たちは多くの場合、「私は今、女とし

てこれを話しています」とか「会社員として話しています」とか言明するわけではない。そうであれば結局のところ、研究者は行為者の内面を推測することしかできないのはいか、と思われるかもしれない。あるいは逆に、ある人が特定のカテゴリーに属することが外見から明らかである場合には、そのカテゴリーのもとで行為しているはずだ、と考えたくもなる。特に性別カテゴリーの場合はそうである。会話における性別カテゴリー使用の研究においては、このふたつの考え方が繰り返しあらわれ、問題になってきた。

本稿で行いたいのは、このどちらの考え方も、退けることである。私たちは、カテゴリーそのものを言葉に出さずとも、特定の活動を行うなかで、ふさわしいカテゴリーを選択しているし、またそれは外見によってなされているわけでもない。そして、そのやりかたは、その活動の参与者にとって理解可能であるのと同じ仕方、研究者にとっても理解可能であり、それゆえ記述可能であること、このことを示したい。

2. 外見から端的にわかるカテゴリーの、その使用を記述する仕方

まず、会話における性別カテゴリー使用の研究を簡単に振り返っておこう。その端緒は、Zimmerman & West の有名な研究である。そこでは、会話のなかに現われる男女間の偏向を見ることで、男女の権力差を示すことが試みられていた [Zimmerman & West 1975]。例えば、「割り込み」の数を数えることによって、男性は女性の話に割り込みやすいという具合である。その際に、会話の参与者が男として、あるいは女として行為していることは、その人が女／男であることから、所与とされている。同様の研究が日本においてもなされた [江原・好井・山崎 1984]。

しかし、先に述べたように、参与者が女に「見える」ことと、その人が女「として」振舞っているかどうかは、異なることである。したがって、性別カテゴリー使用の記述は、相互行為における参与者自身の志向性に基づいている必要があり、またそれによって、相互行為の詳細がどのように導かれているかが示されなくてはならないという、これらの研究に対する批判 [Schegloff 1987; Lynch 2001] がなされることになった（まとめとして [上谷 2001; 小宮 2002] 参照）。

他方、また別の角度からこの問題が浮上している。会話分析を分析手法とする Schegloff と、批判的談話分析を分析手法としようとする人びとの間で交わされた論争 [Schegloff 1997; Wetherell 1998; Schegloff 1998; Billing 1999a; Schegloff 1999a; Billing 1999b; Schegloff 1999b] である。ここで争われているのは、分析者がおこなう記述のなかに、分析者の前提を持ち込まないことの可能性であり、また持ち込むことの是非である（まとめとして [小宮 2005] 参照）。Billig は、いくら会話分析者が「参与者の志向にもとづく」と言ったとしても、彼らは実際には分析者としての自分の前提を持ち込んでいるのだと主張する。この立場からすれば、どのカテゴリーによって参与者を特徴づけるのかということも、結局のところ、分析者の判断によってなされるほかない、ということになるだろう。とりわけ、参与者によって「女」とか「学生」とかいう、カテゴリーを示す言葉が用いられていなければ、そう言われるに違いない。

先行研究のこうした流れのなかには、上に述べたふたつの考え方が現れている。すなわち一方で、性別は外見から明らかなだということを所与にして、分析者はある行為を性別カテゴリーによって説明することが可能であるという考え方であり、他方で、そもそもどのようなカテゴリー化も分析者によるものでしかありえない、という考え方である。以下で

行う分析では、実際の相互行為データにもとづきながら、そこでは言葉による明示的なカテゴリー使用が行われていないにもかかわらず、そこで性別カテゴリー化が行われていることが、他ならぬ参与者たち自身によって理解されている、ということを示しながら、こうした考え方とは異なった道筋を明らかにしていきたい。

最近では、会話分析と批判的談話分析の論争を受けて、批判的談話分析に近い論者のなかにも、Schegloff のすすめにしたがって「参与者の志向にもとづいた」分析を行おうとする者が増えてきている（たとえば [McIlvenny ed. 2002; Speer 2005]）。いわば、会話分析とフェミニズムの志向（feminist perspective）とを調和させよう、という試みである。本稿も基本的には、そうした流れに位置づくものであると言ってよいかもしれない。ただ、そうした研究ではしばしば、分析対象である性別カテゴリー使用は「（政治的に）望ましくない」ものであるという前提が置かれてしまっているように思う。分析対象となるのは、たとえば性別役割分業に留保をつけるような活動であったり、異性愛の通常性を示そうとする活動であったりする。もちろんその分析自体が問題であるわけではないのだが、本稿で見てみたいのは、性別カテゴリー使用のもうちょっと異なった側面である。性別カテゴリーは、特定の問題（ここではセクシュアル・ハラスメント）がどのような問題であるのかという理解を示すための資源としても用いられうるのであり、そうしてたとえば、それが「女性の経験」と関わった問題であることが示されることになる。「望ましくない」カテゴリー使用に焦点を絞ってしまえば、かえってそのカテゴリーを用いて私たちが行っていることが見えづらくなってしまい、またフェミニズムの志向としての視野も、限定されたものになってしまうだろう。

3. 言明されていないカテゴリーのあらわれ

（１）女としての「経験可能性」による「感情の一人称的想像」

これから見ていくみつつの断片は、大学生がセクシュアル・ハラスメントについて話をしている場面の一部分である。この断片のもととなったデータ⁽¹⁾は、以下のようにして集められた。まず、セクシュアル・ハラスメントについてのアンケートを、埼玉大学の「社会学」という授業を履修している 1・2 年生に対して行った。アンケートには、「セクシュアル・ハラスメント調査票」を用いた⁽²⁾。この調査票には、1-1 から 8-14 まで、「『まだ結婚はしなのか』と言われる」というような項目が合計 106 個並べられており、これらの項目のうちセクシュアル・ハラスメントだと思うものにまるをつけよ、という指示がされている。これに直感的に回答してもらったのち、希望者を募って、アンケートを見ながらセクシュアル・ハラスメントについて 20 分程度、話をしてもらい、それを記録した⁽³⁾。

以下に示していく断片 1 は、そのうちの 4 人が参加しているケースのひとつであり、項目の大きい塊である 1 番（の 1 から 11 番まで）についての話しが終わり、2 番（の 1 から 9 番）についての話に移行したところからのものである⁽⁴⁾。

<断片 1>

04 B : 2 番.(.) 2 の 1 から 8. =

05 A : =2 番(.) 全然チェックついてないや.

06 C : [俺も

07 B : [俺もついてないん(.) すよね. 2 番. 15 まで>です<. 19 か.

- 08 A : なんかチェックつけました? ((他の3人を見渡す))
 09 C : つけた人いますか? ((Dを見る))
 10 D : 2, 2 とか.
 11 (0.5) ((みんな、調査票を見る))
 12 C : 2?
 13 B : 2 の 2.
 14 D : おなかの =
 15 A : = あ:, おなかの大きい人は.
 16 B : [あ:....
 17 D : → 「似合わないって, (0.5) 言われたら辛いやだな: って辛い,

図1 会話参加者の座り位置

- 18 B : → 嫌ですね, 女- の子からは- ね:

注目したいのは17行目でDが、項目2の2番「『この職場におなかの大きい人は似合わない』と言われる」について、「似合わないって, (0.5) 言われたら辛いやだな: って辛い,」と述べ、それに対して18行目でBが「嫌ですね, 女- の子からは- ね:」と理解を示すやりとりである。このやりとりのなかで、いかにして性別カテゴリーが現れているのかを見ていきたい。

大きい設問2番に話題が移ると、まずは2番の下位項目にはあまりチェックしなかったことを、A・B・Cの3人が報告し合う(5-7行目)。それを受けてAが、他の3人を見渡ししながら、チェックをつけた項目があるかどうかを尋ね(8行目)、続けて、CもDを見ながら、チェックをつけた項目がないか質問をしている(9行目)。この間、Dはずっと視線を調査票のうえに落としており、Cが自分のほうを向いて質問しているのが見えていたかどうか、あきらかではない。にもかかわらず、ここで質問に答えるべきなのはやはりDである。なぜなら、各々が「どの項目にチェックをしたか」を報告し合う活動のなかで、他の三人はすでに「全然チェックしなかった」ことを報告し合っており、にも関わらず「チェックをつけた」かどうかを尋ねられるのであれば、その質問は、「報告」という行すべき活動をまだ行っていない人に向けられていると聞くことができるからだ。実際Dはそれに対して(視線を落としたまま)「2とか。」と述べ、その項目に自分はチェックをつけたと答えている(10行目)。

この後、D が言及した項目を他の 3 人が探し当てて確認したことが示されたところ（13-16 行目）で、D は「言われたら㍻やだな: って㍻,」と言う。私たちはこの発話を、D がその項目にチェックをつけた理由だと聞くだろう。だが、それはどのようにしてか。

ひとつには、この発話のなされた位置がある。他の 3 人が「チェックしなかった」ことが明らかになったあと、D は「私もしなかった」のではなく「私はチェックした」という答えを行っている。つまり、他の人とは違ったことをしたのである。そうである以上、D はここで、自分の行為が異常なことではないことを示すこと、すなわち理由を述べることを行ってよい（行うべきだ）と思われる。

もうひとつ注目したいのは、この「言われたら嫌だ」という発話の、デザインのされ方である。ここには、問題となっている調査票の項目を、「自らの経験として想像してみる」こと、いわば、「感情の一人称的想像」が含まれている。と同時に、そこには、自分がその経験を想像可能なカテゴリーに属する者である、という理解が示されているように思われるのである。

妊娠して「この職場におなか大きい人は似合わない」と言われうるのは、妊娠する可能性がある女だけである。もちろん男も、そうした発話がなされる状況を想像してみることはできるだろう。しかし、妊娠する可能性のない男にできるのは、妊娠している女の人「この職場におなか大きい人は似合わない」と言われる状況を想像してやることである。つまり、それはあくまで、「他人の経験における他人の感情の想像」であって、「自分の経験における自分の感情の想像」ではない。「経験可能性」がないことに関して、それを一人称的に想像してやることは非常に困難なことであるように思われる。

例えば、ふつう、男は、出産の痛みがどのようなものなのかを、「自分の経験」として想像することはできないだろう。痛いであろうことを想像することはできたとしても、他人の頭痛を想像するようには、女の陣痛を想像することはできないにちがいない。つまり、その身体の部位を持たない人が、その部位が痛いのを、「自分の経験」として想像することは、非常に困難なのである。男が自分が妊娠した状況を想像できないのは、これに類似した困難があるからであるように思える。「おなかが大きくなる」ことを、身体的な感覚として想像しがたい男は、「この職場におなか大きい人は似合わない」と言われたときの感情も、やはり自分の経験としては想像しがたいのではないだろうか。少なくとも、ある経験なり感情なりが特定のカテゴリーと結びついているとき、そのカテゴリーに属する人であれば、その経験なり感情なりへの想像を一人称で話すことが問題なくできるのに対し、そのカテゴリーに属さない人にとってはそうではないように思われる。

このとき、「㍻やだな: って㍻,」という言い方は注目に値する。すでに述べたとおり、この発話は、自分が言われたときの感情を想像するものである。つまりこの発話においては、自分がその状況で感じるであろう感情を想像することができる、ということが前提になっているのである。妊娠して「この職場におなか大きい人は似合わない」と言われることができるのは女だけである。そして、そう言われたときの感情を一人称で想像することのうちの、自分がそう言われうるという「経験可能性」を持っている女であるという理解が、同時に示されているように思えるのである。「㍻やだな: って㍻,」という D の発話は、このようにして、嫌なことを言われうる「経験可能性」を持った女にしかなしえないものに、デザインされている。

ここでは D は、「女」という言葉を明示的に用いてはいない。けれど、発話のこうした

実際、このDの発話のあと、Bはただちに、「嫌ですね、女-の子からは-ね:」と言うことによって、当該の項目が嫌なことであることへの理解を示している。しかも、ここでの「女-の子からは-ね:」という、『女の子』からしたらそうだろう」ということを意味する発話には、「女の子」がどのように感じるかこそが、Dがチェックをつけた理由だと理解したことが、含まれている。つまりBは、Dが妊娠の「経験可能性」にのっとることによって、「感情の一人称的想像」をしたことへの理解を、示しているのである。

(2) 告げ口の文法

<断片2>

断片1の続きで、「この項目はセクハラか」というAの確認の求めに対してDが「うん」と確認を与えたのを受けて、Bが24行目で「あ: 変えとこう:」と言いながら、当該の項目にチェックをつけ直す。Bは、その項目がセクシュアル・ハラスメントではないという自分の判断を、Dの判断を聞くことで変更したのである。それを他の3人は笑いながら非難する(26-28行目)。それに対してBは、「ぴんとこなかった」と言い訳する(29

行目)。その時、A がチェックをつけ直している B の調査票をのぞき込んで、他の項目にチェックとしてつけられているまるが少ないことを、「ここまでつけてないじゃん」と指摘する (30-31 行目)。その発話は、B が先の話の項目だけでなく、他の項目にもまるをつけていないことへの非難に聞こえる。

ここで、まるが少ないということは、B がセクシュアル・ハラスメントとして特定した行為が少ないということである。だが「つけてないじゃん」という A の発話は、単に「あなたがセクハラと判断した行為が少ない」ということを指摘しているのではない。それはむしろ、「あるべきチェックがない」という指摘である。「ついてない」ということが指摘されてよいことであるのは、それが通常ではない状態であるからだろう。つまり、「チェックがある」状態が通常であり、「チェックがない」ことは違反である、というわけだ。そしてここでは、「あるべきチェックがない」ことは、B が「セクシュアル・ハラスメントに気がつくことができない」人である、と指摘することになるのである。こうして、私たちは A の発話を「非難」として聞く。

この A の非難に同調して、C は B の調査票にまるが少ないことを、「この人もう全然まるついてませんよ」と、D に告げ口する。ここで、告げ口とはどのようなものであるのかを考えてみよう。私たちは、母に「お姉ちゃんが叩いた」と幼い妹が言うのを、告げ口として聞く。しかし、私たちは、幼い妹に「お母さんが叩いた」と姉が言うのを、告げ口としては聞かない。そうすると、目上に対して言うことが、告げ口の条件になるように思えるが、私たちは、幼い妹に「隣の家の子があなたの悪口を言っていたよ」と姉が言うのは、告げ口として聞く。そうすると、告げ口であるために必要なのは、告げ口される人に隠していることを、明らかにすることであるようだ。「お母さんが叩いた」のは、しかられたからであり、特に隠すものではないと私たちは受け止めるため、幼い妹に「お母さんが叩いた」と姉が言うのを告げ口とは聞かないのだろう。

また、告げ口とは、告げ口される人に隠しておきたいことを告げることであっても、告げることがなんでもいいわけではない。私たちは、友人に「隣のクラスの誰々君があなたのことを好きだってこっそり教えてくれたよ」と友人に言うのを、告げ口とは聞かない。報告が告げ口として聞かれるためには、報告の内容が、例えば「叩く」というような、悪いことだと見なされうるものである必要があるようだ。そうすると告げ口とは、告げ口される人に隠しておきたいとされている、告げたらその人に非難されると考えうることを、報告することだということになる。

C の「この人もう全然まるついてませんよ」という発話を「告げ口」として聞くことができるのも、B があまりまるをつけていないことが非難されうることだからであるという理解、および B がまるをつけていないことが、D には隠しておきたいことでありうるという理解が、そこに示されているからにはほかならない。D は、先に示したように、調査票の項目についての「経験可能性」を持っている。D は、その「経験可能性」にのっとった「感情の一人称的想像」ができることによって、その経験が「いやなこと」であるかどうかを、他のカテゴリーに属する人よりも正しく想像することができると期待されうる。したがって、D が「いやだ」と思う項目にチェックがなかったとすれば、それは D から非難される可能性をもつのである。このことは、逆にもし D が実際にあまりまるをつけていなかったとしても、男から、B がされたように、「まるついてないじゃん」と非難されることが、ありそうにないことからわかるだろう。つまり、C の「告げ口」が「告げ口」

であるのは、それが「女への告げ口」であるからに他ならない。かりに D が男だったとして、C が同様に D に向かって「この人もう全然まるついてませんよ」と言ったとしても、それは「告げ口」には聞こえないに違いない。

このように、D が「経験可能性」にのっとった「感情の一人称的想像」ができる女であるからこそ、C による事実の報告は、告げ口になりうる。D は C から女「として」告げ口をされているのだ。ここにも、明言されていない性別カテゴリーの使用が、見て取れる。

(3)「苦情可能性」

もうひとつ事例をみてみたい。取り上げる断片 3 は、話が進み、4 番（の 1 から 15 番）が話題になり始めて少ししてからのものである。

<断片 3>

- 01 D : 4 の 15 っ、て、よく、
02 (.)
03 C : まだ 10 分弱だよ。
04 B : ね.=
05 D : = よく、なんかドラマでとかで (.) 出てくる、
06 A : は:。
07 D : ♪シチュエーションだったり♪。
08 C : 4 の何ですか? =
09 D : = > 4 の 15. <
10 C : あ:. [15?
11 B : [15?
12 A : → まるした (.) 俺。
13 B : [あ:.....
14 C : [あ:.....
15 (1.5)
16 B : → いや、まるしてないです。[すみません。((調査票を見ている))
17 C : → 俺も [してません。すみません。((調査票を見ている))
18 (.)
19 B : 見て、あ:でも確かに。

この断片では、まず D が、項目の 4 の 15 番「取引先社員が宴席で女性社員の身体に触るのを見て見ぬふりをされる」を、話題として取り上げようとしている（03-04 行目は、会話の残り時間を確認するスプリットしたやりとりであって関係がない）。D は、それをドラマによく出てくるシチュエーションだと特定しているだけであり、この項目にまるをしたかどうかは示していない。それに対して、その項目を探し当てた A が、自分がそれにまるをしたことを示す（12 行目）。この A の「まるした (.) 俺。」という発話は、いかにも得意げに聞こえ、D がこの項目にまるをしている、すなわち、この項目をセクシュアル・ハラスメントだと見なしていると理解したので、それと同様の判断を自分がしたことゝ妥当性を提示しているように見える。

まず、AはいかにしてDがこの項目にまるをしていると、理解したのだろうか。第一に、すでに見てきたとおり、ここでの活動は各々がどの項目にまるをつけたかを報告し合うものである。したがって、特定の項目を話題として提示することは、それ自体、その項目にまるをしたことだと理解される可能性がある。第二に、その項目が「ドラマでとかで (.) 出てくる」ようなものであるといわれていることが特徴的である。事実として「よくドラマに出てくる」状況は無数にありうる。たとえば、道ばたをただ人が歩いているような状況だって「よくドラマに出てくる」に違いない。けれど、私たちはそれをさして「よくドラマに出てくる状況」だとは決して言わない。「ドラマに出てくる」と述べることは、単にその事実を述べるのではなく、むしろそこに、ドラマに取り上げられるくらい注目されてよい出来事がある、ということを示すことに他ならない。いわば、それは何らかの事件性をもった出来事だ、というわけだ。そうであるがゆえに、Dの発話は、自分がその項目を事件性のあるものとして理解したこと、すなわちセクシュアル・ハラスメントでありうるものと理解したことを示すものとして聞くことができるのである。

では、Aの発話が、Dの判断への理解を示すと同時に、それと同じ判断をしたことの妥当性を示しているように聞こえるのは、いかにしてだろうか。それは、Aの発話が、自分は当該の設問をセクシュアル・ハラスメントだと気がつくことができたことを意味するものであるのと、関係しているだろう。前の節でも示したように、「経験可能性」を持っているDがセクシュアル・ハラスメントだと気がついている項目に気がつかないことは、非難されうることである。だからこそ、Dと同じ判断をすることができたAは、自らの判断の妥当性を、得意げに示すことができるのである。

このAの発話に対してBとCは、まるをしていなかったことをそれぞれ表明している。それだけではない。つづけてすぐに、まるをしていなかったことについて、それぞれ「すみません」と謝っている。そしてこの謝罪は、視線はそれぞれ自分の調査票の上に落とされているにもかかわらず、Dへの謝罪であるように聞こえる。

Schegloffは最近の論文のなかで、社会問題を相互行為の問題として探求する際に、会話のやりとりのなかにあらわれる「苦情可能性 (complainability)」に注目することで、参与者に志向されている当のカテゴリーを分析できる可能性を示唆している [Schegloff 2005]。つまり「謝罪」は（「正当化」や「言い訳」とともに）「非難」に対する第二成分の位置に来る。すなわち、私たちは、非難に対して、謝る。しかし、私たちは、しばしば非難がないのにもかかわらず、形式的には謝罪であるような発話をするのである。

例えば、アメリカでは、夜遅く電話をした際に、「起こしてしまいましたか？ (Did I wake you up?)」と聞き、「ごめんなさい (Sorry)」と謝ることがあるとSchegloffは言う [Schegloff 2005: 463-468]。日本語なら、「夜分遅くすみません」と言うところだろう。その時、私たちは「なんでこんな時間に電話したんだ」と苦情を言われたことに対して、謝っているわけではない。むしろ、苦情そのものはそこになくとも、自らの行為が苦情を言われうるものであるということ（これがSchegloffのいう「苦情可能性」である）を自分が理解しながら行為していること、このことを示すために、私たちはしばしば謝罪の言葉を（文字通りの謝罪としてではなく）用いるのである。

AもDも、「すみません」と言うBとCを非難していたわけではない。にもかかわらず、BとCは謝罪の言葉を口にしている。ここでBとCは、自分たちがチェックをしなかったことが「苦情可能性」をもつ、という理解を示している。しかも、それは「Dからの苦

情可能性」であるという理解があるように見える。

ここで言われる可能性がある苦情とは、当該の項目にまるをしていないこと、すなわち当該の項目をセクシュアル・ハラスメントだとは判断しなかったことに対するものだろう。そして、先に述べたように、Dが女ゆえの「経験可能性」を持つからこそ、Dの判断には妥当性が付与されている。このとき、「女」カテゴリーに属さない者がDと異なった判断を行うことは、Dから苦情を言われる可能性をもつ。BとCが示している理解は、このようなものに他ならない。ここでも、かりにDが男であったとしたら、彼らが「すみません」ということはかなり奇妙に聞こえるにちがいない。男同士で意見が分かれたとしても、それはある項目をセクシュアル・ハラスメントだと判断した男と、しなかった男がいる、というだけのことであり、そこに「苦情可能性」は生じない⁽⁵⁾。「苦情可能性」が生じるのは、「いやだ」と感じる「経験可能性」についてのカテゴリー間の非対称性のもとで意見がわかれるからに他ならない。「判断する／判断しない」という区別ではなく「気がつく／気がつかない」という区別は、その非対称性のもとでこそ有効に用いられることができるのである。

こうしてここでも、私たちは、BとCの謝罪の言葉によって、ここでDが「経験可能性」を持った女としてカテゴリー化されていることを、それが明示的に示されていないのにもかかわらず、理解することができる。セクシュアル・ハラスメントに気がつくことができないことによって、女から苦情を言われたり非難されたりするのは、女やそれに類似したカテゴリーではない人、すなわち男やそれに類似したカテゴリーの人たちである。このことによって、BとCも、男としてカテゴリー化されていると、私たちは理解できるのだ。そうして、このやりとりのなかで、参与者の志向として、女と男を要素した性別カテゴリー集合が用いられていることを、私たちは知ることができるのである。

4. おわりに

私たちは、誰かと話をするときに、相手がどのようなカテゴリーに属する人として行為しているのかを、直観的に知ることができる。それは、そのカテゴリーが見るだけで端的にわかることとは別のこととして、やりとりのまさにそのなかからもたらされている。つまり私たちの直観は、まさにそのやりとりを理解することによってもたらされているのである。分析で示したように、その理解のされ方は、分析者にとっても記述可能である。

私たちがこの社会のなかで「女」であったり「男」であったりする仕方を研究しようとするのであれば、特定の行為をあらかじめ性別カテゴリーによって説明してしまったり、またどのような分析も分析者の前提からのものでしかないと言ってしまう前に、私たちの具体的なやりとりにおいて、またやりとりそのものとして、私たちが「女」であったり「男」であったりできる、そのやりかたを記述していくべきなのだ。それによってこそ、そこでの「女」としての経験や「男」としての経験をのあり方も、当事者の理解そのものとして、探求することができるのである。

注

- (1) 本稿で取り扱うデータは、科学研究費基盤研究B「協同作業空間の複層性に関する社会学的研究」(代表：山崎敬一)によって収集されたものである。
- (2) これは、福井県の武生市(市役所)が行った「セクシュアル・ハラスメント調査」の調査票、および

労働省が平成9年6月～7月に行ったセクシュアル・ハラスメントの調査の調査票のうち、「セクシュアル・ハラスメントの観点から問題となると思うか」を問う項目を加工したものである。

- (3) 記録には、ビデオカメラ2台、ICレコーダー1台を用いた。採取したのは、男3人×2ケース、女3人×1ケース、男2人女2人×3ケース、男3人女1人×1ケース、男1人女2人×1ケース、男2人女1人×1ケースの、合計9ケースである。断片は、このうち男3人女1人のケースをビデオカメラで撮影した映像を、トランスクリプトしたものである。
- (4) 断片で使用している記号は、以下のとおり。(参考 [西阪; 田中 2004; Atkinson & Heritage 1984])
- , : 下降調のイントネーションで、連続的であることを示す。
 - . : 下降調のイントネーションで、発話の区切りを示す。
 - ? : 上昇調のイントネーションで、発話の区切りを示す
 - [: 複数の参与者の発する音声为重なり始めている時点を示す。
 - : 強調されていることを示す。
 - = : 2つの発話もしくは発話文がとぎれなく密着していることを示す。
 - : : 音が伸ばされて発話されていることを示す。
 - : 言葉が不完全なままとぎれていることを示す。
 - h : 呼気音を示す。また haha などは、笑い声を示す。
 - ¥ : 挟まれている部分が、笑いながら発話されていることを示す。
 - ↑ : 音が上がって発話されていることを示す。
 - <> : 前者は、発話の速度が速まっていることを、後者は遅くなっていることを示す。
 - () : 聞き取り不可能な箇所を示す。聞き取りが確定できないときには、該当文字列がこれで括られる。また中に数字が記入されている場合は、間の長さを表わす。ピリオドが括られている場合は、0.2秒以下の場合を示す。
 - (()) : 括弧内が注。
- (5) たとえば、Dが女ではなく「フェミニズム志向の男性」であったなら、そこに苦情可能性が生じることもありえるだろう。その場合には、「フェミニズムに関する知識の所有／非所有」という非対称性のもとで、誰が「正しい」判断をする権利を有するかが決定されるだろう。同様のことは、(2)の「告げ口」についても考えられうる。しかし、むしろここで重要なのは、「ここでの」権利の配分の仕方が、性別カテゴリー使用を明らかにしていること、このことである。

文献

- “Transcript notation” in Atkinson & Heritage ed., 1984, *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge University Press.
- Billing 1999a “Whose Terms? Whose Ordinarity? Rhetoric and Ideology in Conversation Analysis”, *Discourse & Society* 10(4).
- 1999b “Conversation Analysis and claims of naivety”, *Discourse & Society* 10(4).
- 江原由美子・好井裕明・山崎敬一 1984 「性差別のエスノメソドロジー」, 『現代社会学』18.
- 小宮友根 2002 「成員カテゴリー・結合の論理・性別秩序——『性差別のエスノメソドロジー』再考」『現代社会理論研究』12.
- 2005 「『価値判断』の分析可能性について——社会学における記述と批判」『年報社会学論集』18: 241–251.
- Lynch 2001 “Ethnomethodology and the logic of practice” Schatzki, Cetina, Savigny eds. *The Practice Turn in Contemporary Theory*, Routledge.
- McIlvenny ed. 2002 *Talking Gender and Sexuality*, John Benjamins Publishing Company.
- 西阪 仰「トランスクリプションのための記号」(<http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm>).
- Sacks 1972a “An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology”, Sudnow ed. *Studies in Social Interaction*, The Free Press=1989 北澤 裕・西阪 仰訳「会話データの利用法」『日常性の解剖学』マルジュ社.

- 1972b “On the analyzability of stories by children” Gumpertz & Hymes ed. *Directions in Sociolinguistics* Holt, Rinehart and Winston.
- Schegloff 1987 “Between Micro and Macro”, Alexander, et al. ed., *The Micro-Macro Link*, University of California Press=1998 石井幸夫訳「ミクロとマクロの間」『ミクロ-マクロリンクの社会理論』新泉社.
- 1997 “Whose Text? Whose Context?” *Discourse & Society* 8(2).
- 1998 “Reply to Wetherall”, *Discourse & Society* 9(3).
- 1999a “‘Schegloff’s text’ as ‘Billing’s data’: A Critical Reply”, *Discourse & Society* 10(4).
- 1999b “Naivety vs. Sophistication or Discipline vs. Self-Indulgence: A Rejoinder to Billing” *Discourse & Society* 10(4).
- 2005 “On Complainability,” *Social Problems* 52(4).
- Speer 2005 *Gender Talk: Feminism, Discourse and Conversation Analysis* Routledge.
- 田中博子 2004 「会話分析の方法と会話データの記述法」山崎敬一（編）『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣.
- 鶴田幸恵 2004 「トランスジェンダーのパッシング実践と社会学的説明の齟齬——カテゴリーの一瞥による判断と帰納的判断」『ソシオロジ』151.
- 2004, 「性別判断における外見を見る『仕方』」『現代社会理論研究』14号.
- 上谷香陽 2001 「性別に関わる諸現象の偶有性と秩序性」『現代社会理論研究』11.
- Wetherell 1998 “Positioning and Interpretative Repertoires: Conversation Analysis and Post-Structuralism in Dialogue” *Discourse & Society* 9(3).
- Zimmerman & West 1975 “Sex Roles, Interruptions and Silences in Conversation”, Throne & Henley eds. *Language and Sex: Difference and Dominance* Newbury House Publishers.

謝辞

執筆にあたり、たくさんの方々からアドバイスをいただきましたが、特に、東京都立大学大学院社会科学研究科社会学専攻博士課程の小宮友根さんには、何度もデータセッションにつきあっていただき、執筆をサポートしていただきました。記して、感謝いたします。

（東京都立大学大学院社会科学研究科社会学専攻博士課程 XXXXXXXXXX）